

本学では平成24年に上野商工会議所・伊賀市と連携して「伊賀連携フィールド」という組織を作り、忍者研究に取り組むことになりました。その研究は、始めは人文学部の歴史・文学を中心とした文系中心の研究でしたが、理系施設の伊賀研究拠点も研究に加わり、さらには教育学部・生物資源学部・工学部・医学部の教員も参加し、学部を横断した研究にまで発展しました。そこで明らかになったのは、忍者とは決して戦う人たちではなく、戦いを避けるために情報を収集して主君に伝える人たちでした。

そして、忍者が用いた忍術とは、消えたり戦闘したりするための術でなく、生存のための術でした。現代社会でも情報産業は最先端の産業であるように、忍者は当時の情報産業であることから、そこには当時最先端の技術が凝縮されていました。それを現代の分類に当てはめると、医学・薬学・生物学・農学・気象学・天文学・数学・心理学といった学問に分類されますが、個別分散化したものとしてではなく、さまざまな知識が総合され、それを実践していたのが忍者の人たちでした。

私たちは明治以降、西欧の文化を取り入れたため、忍者が用いたような日本の風土に根ざした伝統的な部分は切り捨てられ、忘れ去られてしまいました。しかし、そうした術は、長年にわたって形成されてきた、日本や日本人に適合した術なのではないでしょうか。自然と対峙するのではなく、自然と調和した、人と環境に優しい術であると言えると思います。

機器を使うのではなく、五感を研ぎ澄ますことによって天候や方位を判断し、鳥の飛び方から敵がいるかどうか探り、動物の動きをまねて体の使い方を学ぶといったあり方は、自然の中でどのように生きていったらよいか考え、経験則から生み出された知恵であると言えます。

現代の我々はあまりに機器に頼りすぎていて、自然から直接感じとるのではなく、機器を通じて数値を測り、さらにその判断もAIに任せるという状況になりつつあります。しかし、果たしてそれでよいのでしょうか。人間としての生きる力・考える力が失われ、機器がなければ何もできない状況に陥ってしまいます。

今年忍者・忍術学の大学院試験を受験して入学した3人の中には、伊賀に移住して農業をしながら大学院に通っている院生がいます。実際の伊賀者の暮らしとはどのようなだったのか、身をもって体験し、暮らしの中から忍者を考えていこうという試みです。単に研究のために数日間対象地域に入るのではなく、そこで暮らすことによって見えてくるものはたくさんあると思います。

大学院生の三橋 源一さんは、「伊賀者とは自然と農村の中で多様な関係性の中から生み出されたものなので、伝統的な村に移住し、そこで自然と村の暮らしの中から伊賀者の姿を探り、今の時代にあった自存自衛のあり方を模索したいです」と意気込んでいます。

忍者・忍術学研究は始まったばかりです。これからさまざまな試みをする事によって、日本・日本文化について再考していけたらと思います。



伊賀に移住して研究に取り組む三橋 源一さん(H30.05)



ブルーベリー収穫(H30.08)